

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01064

研究課題名(和文) SNSがアフリカの口頭伝承文化に与えるインパクト：マンデのグリオの事例

研究課題名(英文) The impact of SNS on the African oral tradition: The case of Mande griots

研究代表者

鈴木 裕之 (Suzuki, Hiroyuki)

国土舘大学・法学部・教授

研究者番号：20276447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：現代アフリカにおいて重要性を増しているコミュニケーション・ツールであるSNSが、西アフリカのマンデ系諸民族の語り部グリオによりどう使用され、彼らの口頭伝承文化にどんな影響を与えているのかについて、コートジボワールのアビジャンにおいて、フィールドワークに基づく手法で明らかにした。マンデ系のグリオは、叙事詩を語り伝え、祭礼の際に「誉め歌」を歌うとともに、ポップスの分野でも活躍している。彼らがその楽曲制作においてデジタル機器を活用するとともに、SNSにより積極的に自身の音楽活動を発信することで、アフリカで伝統的に発展してきた「声の文化」が変容しつつある状況を具体的に理解することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、アフリカの口承文化と最新のテクノロジーであるSNSとの関係に着目することで、伝統的世界とグローバル化との関係の一形態を具体的に解明した。一見すると対立関係にある両者であるが、音声と映像を瞬時に送信できるデジタルメディアはアフリカの伝統的な「声の文化」と相性がよく、グリオは積極的にSNSを活用しながら自身の音楽活動を展開していた。

研究成果の概要(英文)：I had researched on the influence of SNS (social networking service) on the African oral culture of today. SNS is increasing his importance as the communication tool in modern Africa. I conducted research on the way the griots who are professional reciter-singers of Mande people of West Africa utilize SNS for their musical activities at Abidjan, the economical capital of Ivory Coast.

The Mande griots hand down the epic of Sunjata, sing the praise songs in festivals and play as singers on the pop music scene. They make good use of the digital equipment to make their music and send out messages about their musical activities on SNS. Through these phenomena, I understand concretely how the African traditional oral culture is changing nowadays.

研究分野：文化人類学、アフリカ音楽、アフリカ文学

キーワード：アフリカ マンデ グリオ 口頭伝承 音楽 SNS デジタル・メディア

## 1. 研究開始当初の背景

無文字社会であるアフリカ社会では「声の文化」が発達し、口頭伝承が現在でも重要な役割を果たしている。しかし同時に、学校教育や活字メディアが発達するなかで「文字の文化」も確固とした位置を占め、さらにテレビに代表される電子メディアを経て最新のデジタル・メディアの急速な普及により、アフリカ社会におけるコミュニケーション環境は「声の文化」から「文字の文化」への移行期にあると同時に、新たな「声の文化」の創出の時期にもある。

無文字社会において伝統的に育まれてきた声の文化を「一次的」とすると、文字の文化である科学技術の領域に属すデジタル・メディア(スマートフォンによる SNS など)を通して現在生みだされている声の文化は「二次的」と言える。このように「一次的な声の文化」「文字の文化」「二次的な声の文化」が共存する現代アフリカにおいて、これらの相互関係の動態をフィールドワークにもとづく調査・研究により明確にすることで、オラリティ(声性)とリテラシー(文字性)が人類の思考・表現様式においてどのような関係性を持つのかを理解することができると思われる。

## 2. 研究の目的

「一次的な声の文化から二次的な声の文化への移行」に焦点を当て、コートジボワールのアビジャンにおいてマリ帝国の系譜を引くマンデ系民族のグリオ(語り部)が、その活動においていかに SNS を活用しているかについてフィールドワークを実施する。

13 世紀に成立したマリ帝国の建国史<スンジャタ叙事詩>を口頭伝承により伝えるグリオは「一次的な声の文化」の実践の担い手で、祭礼・儀礼の際に演奏し、誉め歌を通して出席者をマンデの歴史と結びつける。こうした際に、祭りの告知、ライブ配信、映像・画像の拡散に Facebook、X(旧 Twitter)、WhatsApp などの SNS が活用されるが、デジタル・メディアの利用により祭りの組織・運営のあり方、出席者の参加様式、グリオの演奏形式などに生じる変化を調査し、「二次的な声の文化」が生成するプロセスを解明する。

また、マンデ系の人々はヨーロッパ、アメリカなどに広く移住しているが、グリオの配信する情報は移民の間にも拡散・共有されている。そこで、グリオが SNS を通してどのように国際的ネットワークを構築し、どのような情報を交換・共有し、音楽的表現の枠組みをどう変容させてゆかについても調査する。

## 3. 研究の方法

コートジボワールのアビジャンを中心に、各年度、8月に約1か月のフィールドワークを実施し、一次資料および文献資料を収集する。基本的に4月~7月は調査の準備、9月~3月は調査で得た資料の整理・分析をおこない、「準備 調査 整理・分析」というサイクルを3年間積み重ねることにより、アビジャンのグリオが SNS を活用する実践の様相を把握しながら、デジタル・メディアがグリオの音楽的表現を中心とした「声の文化」にどのような影響を与えているかを明らかにする。

当初はフランス(パリ)、ギニアにおいて比較のための調査をおこなう予定であったが、コロナ禍による飛行機搭乗手続きの複雑化の影響により、調査地はアビジャンに一本化した。また同じ理由から、2021年度は8月の渡航が困難であったため、2022年2月~3月にフィールドワークを実施した。

各年度の研究成果は日本アフリカ学会学術大会での口頭発表、国士舘大学教養学会紀要『教養論集』への論文、という形で発表していった。

## 4. 研究成果

コートジボワールのアビジャンでのフィールドワークを、2022年2月15日~3月16日、2022年8月15日~9月15日、2023年8月14日~9月12日の3回にわたって実施し、グリオによる祭礼・儀礼における SNS 活用状況を調べるための参与観察、SNS 活用方法についてのグリオへの聞き取り調査、現地における音楽事情を理解するための音楽業界関係者、ジャーナリスト、研究者などへの聞き取り調査をおこなった。その結果、以下の成果を得ることができた。

### (1) 祭礼・儀礼におけるデジタル・メディアの活用

マンデ社会では伝統的な祭礼・儀礼は重要な意味を持ち、今日においてもさかんに実践されているが、なかでも結婚式と子どもの命名式は重要で、おおくの親族・友人が参集し、かならずグリオが招待されて誉め歌を歌う。アビジャンにおけるグリオの演奏形態は、バラ(木琴)、コラ(ハープ=リュート)、ンゴニ(リュート)という伝統楽器によるアコースティック形式から、エレキ楽器を使ったバンド形式を経て、現在はジェンベと呼ばれる太鼓の合奏を伴奏に、アンブリファイドされたマイクで歌う形式が主流となっている。そこに、あらかじめコンピューターでプログラムされたリズムをスマートフォンにダウンロードし、それをアンプにつなげてスピーカーから出力する、という伴奏形式が登場した。これにより太鼓奏者のスキルという技術的限界

にとらわれず、自由に曲目を選択することが可能となった。コンピューター・プログラムにあわせて歌うには従来とは異なるセンスが必要なこと、リズムをプログラムしダウンロードする手間がかかることから、まだ太鼓合奏による伴奏が主流であるが、プログラム形式が登場したという認識はグリオのあいだに共有されており、その利用頻度も増加しつつある。

さらに注目すべきは、SNS によるライブ配信である。結婚式や命名式は参加者により SNS を通してライブ配信され、当日出席できない親族・友人などがリアルタイムで視聴し、コメントを投稿することが一般的となっている。これにより、グリオの誉め歌の「場」が対面的な空間から、スマートフォンを通じたデジタル空間へと拡大している。また、撮影された映像・画像は SNS にアップされて拡散し、時間・空間を超えて何度も視聴されることになる。こうしてアビジャンの一地点で歌われた誉め歌は欧米に移住している親族・友人のもとにまで届き、デジタル・メディアを通じたネットワークがつねにアクティブ化している状況が確認できた。

#### (2) ポップス分野におけるデジタル・メディアの活用

マンデのグリオはその音楽的才能ゆえ、ポップスの分野においてもポップスターとして活躍している。

デジタル技術の普及により低予算でサウンドやビデオを作成することが可能となったため、おおくのグリオがパソコンを使用して楽曲を録音し、プロモーションビデオを作成し、それらを YouTube などにアップしている。また、祭礼の場合とおなじく、コンサートやイベントの際にはスタッフによる SNS 上での公式なライブ配信、聴衆による個別的なライブ配信がおこなわれて、リアルタイムで映像が共有されるとともに、終了後には映像・画像の SNS へのアップがさかんにおこなわれている。これらの視聴はほとんどが無料であるが、SNS 上での露出はもっとも効果的なプロモーションの手段と捉えられており、アーティストはレコーディングやライブ活動と並んで、SNS の配信に力を入れている。

SNS の配信により不特定多数の聴衆に瞬時に情報が公開され、コメント機能により世界中からさまざまな意見が投稿される。グリオのポップス分野での活動において、対面的なライブ空間、テレビや CD などの従来のマス・コミュニケーションによるメディア空間に加え、SNS 上でのデジタル空間の重要性が急速に発達しており、それに伴ってこの新しい空間に親和性の高い音楽形式、映像の形態などが生まれつつある状況を具体的に把握することができた。

#### (3) 祭礼・儀礼における歌手の地位の変容

SNS の使用とは直接関係ないが、調査の過程で祭礼・儀礼で演奏する歌手の地位について、興味深い変化を観察することができた。

マンデのグリオは父系の単系出自をたどる職能集団で、一種のカースト的性格を保持している。基本的に音楽活動はグリオに一任され、儀礼・祭礼での演奏はグリオにより独占されている。しかし近代化が進み、多民族的状況にあるアビジャンにおいて、グリオ以外の歌手が伝統音楽の活動に参入するという事例が観察された。それらを整理すると、本来は歌わない別のカースト民が歌う（カースト制における役割の変化）、父系は非グリオだが、母系がグリオであるゆえに歌う（父系出自ラインの優位性から母系出自ラインの有効性への変化）、非グリオがグリオの唱法をマスターして歌う（グリオ系譜に対する歌う技法の優位性）、グリオの家系の者が歌わず、非グリオが歌う状況を容認（グリオ職能集団の機能低下と開放化）となる。

こうした現象はまだ少ないが、都市化・近代化が伝統的規範に与える影響を考察するための事例として重要である。さらにグローバル化、デジタル化が進むなかで、マンデ社会におけるグリオの在り方がどのような変容を遂げてゆくのか、注視してゆく必要がある。

#### (4) 学術的インパクトと今後の展望

本研究では、一見連続的に見える声の文化を、デジタル・メディアというテクノロジーとの関係性により「一次的」「二次的」と分けて捉えている。この発想はオングによるものだが（オング『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991、5-9）この両者が共時的に存在するアフリカで調査することにより、オーラル・コミュニケーションによる重層性をダイナミックかつ実証的に捉えることが可能となった。

コートジボワールのアビジャンにおけるマンデのグリオがその活動においていかに SNS をはじめとするデジタル・メディアを活用しているかについて調査を進めることで、「一次的な声の文化から二次的な声の文化への移行」の具体的な様相があきらかになった。ここから次の段階へ研究を進めるために、今後の展望として以下の2点を挙げておく。

##### 他の国・地域との比較研究

マンデ系民族はコートジボワールのみならず、ギニア、マリ、ブルキナファソなどに広く居住している。またフランスやアメリカなどにおおくの移民が移住している。本研究ではコロナの影響もあってコートジボワールに調査地を限定したが、これら隣国および移住先との比較研究を進めることにより、国・地域の社会的状況の違いがグリオによる SNS の使用状況に与える影響、および、SNS による国境を超えたネットワーク構築の様相をあきらかにする必要がある。

##### あらたなる民族的アイデンティティ生成の可能性

SNS による情報の交通は、各人のアイデンティティに心理的に作用するであろう。グリオは祭礼・儀礼という対面的状況において誉め歌によりマリ帝国の歴史と個人を結びつけ、マンデとし

でのアイデンティティを鼓舞してきたが（一時的な声の文化）、SNS を通して「二次的な声の文化」がデジタル空間に開放されることで、それにアクセスする世界中のマンデの人々にあいだに、地域共同体や国家とは別のレベルで民族的アイデンティティが生成される可能性がある。その様態を、フィールドワークにもとづく調査を通して、具体的に探究する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木裕之	4. 巻 86
2. 論文標題 アビジャンで「歌う」のはグリオだけではない：アフリカ現代都市における伝統芸能の変容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国土館大学 教養論集	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木裕之	4. 巻 87
2. 論文標題 マンデ・ポップスにおける共同性と個性の関係：有名アーティストの具体例から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国土館大学 教養論集	6. 最初と最後の頁 1 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木裕之
2. 発表標題 アビジャンで歌うのはグリオだけではない：変容するマンデの「誉め歌」の実践
3. 学会等名 日本アフリカ学会 第60回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木裕之
2. 発表標題 マンデ・ポップスにおける共同性と個性の関係：モリ・カンテとサリフ・ケイタの場合
3. 学会等名 日本アフリカ学会 第61回学術大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------